

2025/2026 年度 山梨学院大学
国際リベラルアーツ学部
FD 活動報告書

令和 8 年 2 月 24 日

1. マイナー（副専攻）制度導入

iCLA では、英語で学び学位が取得できる他大学のプログラムに対し競争力を高めるため、コア・カリキュラムのさらなる充実を図るべく「マイナー（副専攻）制度」の導入を計画し、それに関する FD を二回開催した。

今年度初回の FD は 6 月 2 日に開催された。主な目的はマイナー制度の概念と構造を教職員に周知し、理解を深めることであった。このセッションは、リ・イジュンクラレンス先生がファシリテーターを務め、提案された制度に関し、質疑応答を通じてその制度の改善が図られた。マイナーの一般要件や提案されたコース構成において、学生の視点からの履修の可否や、事務手続きなどの特有な条件について議論が行われた。iCLA の従来のシステムへ円滑に組み込めるように、教員によるアドバイジング、学生のマイナー登録要件、ならびに導入までのフローチャートおよびタイムラインについても共有された。

オープンディスカッション形式のセッションが設けられ、包括的な議論も行われた。「学習者中心の学び」という主目標に沿って、マイナー制度をいかに活用できるか、また学際的な教育の促進や学生全体の質の向上にどう繋げるかなどについて、活発な意見交換があった。第 1 回の最後に、各メジャー教員に次回の FD セッションまでに、各専攻分野におけるマイナーの詳細について協議を進めるよう指示をだした。

第 2 回の FD は 7 月 9 日に開催され、各メジャーコーディネーターから協議についての報告がなされた。報告内容は各マイナー分野のコンセプトや構造、その他の詳細である。この FD は、マイナー制度の最終決定に向けての承認会議でもあった。データサイエンス、グローバルビジネス&経済学、人文教養、日本研究、心理学、政治学の全メジャーと各コーディネーターが、それぞれのマイナー分野に関するビジョンを発表し、各プレゼンテーションの後には質疑応答形式の意見交換も行われた。多くの議論は各分野での実施実現性に焦点が当てられ、各メジャーが選択された科目や構成の背景や根拠に関して教職員の間で意見を共有した。

マイナー制度は 2026 年春学期より導入される予定である。上に述べた 2 回の FD の締めくくりとして、2026 年度の初導入時は、全メジャーのなかの 3 分野（日本研究、政治学、心理学）を先行導入することが合意されており、残りのメジャーの導入に関しては、2027 年度以降の導入に向けて準備を進めることとした。初年度の導入後にも学生の意見を収集するアンケート調査を実施する予定があり、改善策を講じる計画である。

2. 人工知能・AI に関する FD

AI エンジン使用の頻発により、大学における教育は疑いなく変化を余儀なくされている。こうした変化は、不正行為や剽窃という問題にとどまらず、教育手段や教育理念の全体に大きな影響を与えている。iCLA はこの大きな変化に応じて、2025 年度の最終 FD セッションは、授業における適切な AI の活用方法の検討に充てられた。

本セッションの講師は、津田彩乃先生が務めた。学生が授業の文脈に沿って学修することを確実にするため、シラバス、課題、および教材を整合させることの必要性が強調された上で、AI 利用に関する「AI-in（活用）」または「AI-out（不使用）」という 2 つの方向を提示し、教員はシラバスや課題の指示において、AI 利用に関する方針を明記することが推奨された。

「AI-in」の部分では、AI をどう倫理的に活用できるかについて、津田先生が多様な方法を紹介した。その中で、計画立案 (AI-Planning)、協働 (AI-Collaboration)、探究 (AI-Investigation) などのような様々な側面を取り上げ、AI を取り入れる手法は授業内の課題によって決めることを重視すべきだとされた。使用方法にかかわらず、授業内での AI 利用を許可する際に、学生は使用したプロンプトを申告・記録させることを津田先生が提案した。これは、適切な AI 利用を担保することを意図してである。この方策により、AI はあくまで学習を補助するものであり、学習プロセスそのものを代替するものではないという理解を学生たちに促し、適切な AI 利用方法を定着させることが期待できる。

一方、「AI-out」に関しては、実際には AI の使用を完全に禁止することはできないため、教員が自分の授業で「AI-out」を方針とするのであれば、授業内容の文脈（コンテキスト）に即した宿題の設計に工夫が必要であるとの認識もあった。この工夫が機能すれば、授業内容がわからない AI による自動生成回答を見分けることができ、不適切な使用を未然に防ぐことも可能でなると考えられる。

本 FD は教育に携わる教員にとっていくつかの重要な問題点に触れた。来年度の FD も今回のセッションを踏まえ、AI に関わる FD を開催し、AI と教育について検討を続け、活用方法について協議する方針である。

以上